# イラン（ペルシャ）建国物語『王書』の三部構成と『古事記』の三巻構成

夜久正雄

イラン（ペルシャ）の「建国物語」といわれる『王書』は、十一世紀初頭フェルドウスィーの著作という。平成十一年（一九九九年）岩波文庫で、岡田恵美子訳が出版された。貴重な労作である。

カバーに次のように書かれている。

「王書――古代ペルシャの神話・伝説

ササーン朝ペルシャがアラブの侵攻で倒れて三百数十年、一一世紀初めにアラブ中央政権に対抗して書かれたペルシャ民族高揚の叙事詩――神話・伝説・歴史時代の三部構成からなるペルシャ建国の物語。今でも、誰でもその一節を暗誦することができる、と言われるほどイランの人々に愛されている『王書』からその名場面を抄訳。」

右の「三部構成」という点についてはさらに詳しく本訳書の「解説」が説明している。

「第一部は最初期文明の神話時代。第二部は英雄たちの活躍する伝説の時代。・・・『王書』には続いて本訳書で割愛した歴史時代があって、神話・伝説・歴史の三部構成になっている。最後の第三部はササーン朝歴代の王の統治が語られて、最後の王までたどりつく。」

右の神話・英雄伝説・歴史という三部構成の建国物語は、『古事記』と同じ構成である。

『古事記』は上巻神話・中巻英雄伝説・下巻歴史物語という構成だからである。

もう少し詳しく説明すると、上巻は神々の物語すなわち神話。中巻は神武天皇から応神天皇まで、カムヤマトイハレヒコノスメラミコトからホムダワケノミコト応神天皇までの英雄伝説。下巻はオホサザキノミコト仁徳天皇から、いはゆる「倭の五王」といはれる五天皇を経て、ヲハツセノワカサザキノミコト武烈天皇で一旦仁徳天皇の血統の天皇方が断絶し、応神天皇五世のヲホドノミコト継体天皇が推され出て皇位継承、つづいて仏教招来のアメクニオシハルキ・ヒロニハノミコト欽明天皇、トヨミケカシキヤヒメノミコト推古天皇に至るまで。これが下巻である。歴史物語の時代ということができる。

『古事記』の上・中・下三巻の構成が、神話・英雄伝説・歴史物語の三巻の構成であるとする私の考えは、ギリシャの歴史叙述の開展を論じられた村川堅太郎博士の論説（「歴史叙述の誕生」中央公論社・世界の名著5『ヘロドトス歴史トゥキュデス戦史』昭和四五年初版五九年九版）から思いついたものである。（拙論「東西歴史文明成立のパラダイム（総説）――神話・叙事詩・歴史物語・編年体史のつながり方を軸として――」『亜細亜大学アジア研究所紀要』二〇号、平成五年）

『王書』の「解説」は「『王書』成立の背景としてペルシャ帝国の興亡」を次のように書いている。

「紀元前六世紀にペルシャのアケメネス朝興る。前三三〇年アレクサンダ大王東進により大帝国崩壊。セレウコス（アレキサンダー大王の武将）のシリア帝国。パルティア王国（前三世紀中葉～後二二六年）。ササーン朝ペルシャ（二二六年～六五一年、国教ゾロアスター教）アラブ人侵略六五一～イスラム化政策、アラビア文字）トゥーラーン（トルコ・モンゴル民族大移動）」

そこで、『王書』と『古事記』とは、「作品に仮託された意図の差向けられる方向が」「逆になる」という。

「日本では、中央の天皇の権威がより広範囲に及ぶこと。ペルシャでは、アラブの中央政権に対抗してペルシャ内にいくつか台頭してきたペルシャ人の地方王侯によるプロパガンダとしての『ペルシャ建国の物語』である。」

「ペルシャ高揚の精神を盛った『王書』は三十余年におよぶフェルドウスィー（九三四？～一〇二五？）の努力によって完成したが、こうした試みは彼以前にもいくつかみられる。古くはササーン朝最後の王ヤズドギルド三世（～六五一）が、天地創造からホスロー二世（在位五九〇～六二八）にいたる諸王の歴史を

学者に命じて編纂させたが、その原文もアラビア語訳本も失われてしまった。

こうしたパフラビー語（ササーン朝ペルシャ上層階級の語）（一般民衆は口語としてのペルシャ語）による神話・伝説・歴史の資料、そのアラビア語訳は、この他にもある。・・・（中略）・・・フェルドウスィーが『王書』の作成にあたり用いた資料として二作品をあげることができよう。

一、トゥース（フェルドゥスィーの生地）の大守アブー・マンスール（九六一歿）の命令で編纂された散文作品。・・・九五七年完成、『王書』。

一、ダキーキー（九七八頃没の詩千行）

『古事記』は、推古天皇の御代聖徳太子・蘇我馬子共編の国史（六二〇年）（『天皇記・国記及び百八十伴百姓本記』）から天武天皇の勅語の旧辞（稗田阿礼誦習）（六八一年頃か？）を経て、元明天皇の御代・太安万侶の撰述（七一二年）によって完成する。

これと、『王書』の成立と較べてみると、『王書』が、ササン朝最後の王セルドギルド三世（～六五一）の『王書』「天地創造からオスロー二世に至るササン朝ペルシャ諸王の歴史」）（残存せず）を経て、アブー・マンスールの『王書』（散文作品）（九五七年完成）ほかの資料を参照して、フェルドウスィーによって完成された（一〇二五以前）といふ経過と、一応比較することができる。

全体として、『古事記』を一応六二〇年～七一二年とすると、約百年かかって完成したことになる。『王書』は六五一年～一〇二五年頃となる。約三七〇年かかっている。『王書』第一作（残存せず）の方が、『古事記』の原形かと見られる聖徳太子撰国史より二、三十年遅れている。しかし、ペルシャの文明というのは、西暦紀元前六世紀のアケメネス朝からと考えられるので、全体としては、『古事記』より古いとみられる。

『王書』の三部構成も、恐らく『古事記』の上・中・下三巻よりも古いであろう。

これが偶然の一致か、『王書』の影響が『古事記』に及んだのか、にわかには決めがたい。

数年前、正倉院御物の展覧会が行われた。その時のテレビ報道で、例の「樹下美人像」の「六双屏風」が写し出された。そしてその仏像が、ペルシャの「樹下美人像」から、中国・敦煌の「樹下美人像」を経て、正倉院の「六双屏風」に達した、という説明がなされた。

この伝来関係は実に明瞭だと思った。ただ私はこの「六双屏風」の樹下美人がそれぞれ表情を異にしているのを見て、その美しさに、心を打たれた。ペルシャ・中国のそれは、それぞれ一点づつであったので、よくはわからなかったが、表情は類型的であった。その点で「六双屏風」の樹下美人像は、正に日本人の芸術であると思った。しかし樹下美人像という類型がペルシャから中国を経て正倉院に達したことは間違いない。

これと、すぐ比較するのは、用心しなければならないが、神話（天地創造から文化の起源の神話）英雄叙事詩、王者たちの歴史物語という三部構成の「建国物語」という表現様式は、あるいはペルシャ～（中国）～日本という伝来を持ったかも知れない。その中間の中国の『史記』が、神話・伝説を抹殺乃至倭少化して、「歴史」中心の「建国物語」にした、と言えないこともない。ペルシャの『王書』の三部構成は、中国をくぐり抜けて日本に達して『古事記』が出来た、ともみられるのである。ペルシャの『王書』も、ギリシャの歴史叙述、あるいはユダヤの建国物語としての『旧約聖書』に源をもつのかも知れない。

「歴史」を書く、ということは、推古朝で聖徳太子がとりあげて実行なさったのであるが、それは、中国の『史記』を中心にする歴史文明を受容して実行なさったことである。その中で『古事記』の三巻構成は、『史記』とは全く違う叙述方法であって、聖徳太子の独創としてもいいが、樹下美人像の例もあることであるから、古代ペルシャ歴史文明が中国を飛び越えてまたはくぐり抜けての伝来・刺激とみられないこともない。

もっとも『王書』と『古事記』とは、形はよく似ているが、内容は全くちがう。姿がちがい、宗教がちがう。そのことは云うまでもない。

『古事記』『日本書紀』の「建国物語」が、書き方が『史記』と違っているのを悲しんだり、『王書』と同じなのを喜んだりすることはない。

社会主義中国の「歴史認識」と自由主義国日本の「歴史認識」が違うのは当然なのである。「社会主義」中国の「歴史認識」の強制とは、社会主義（共産主義）の対外宣伝ということである。世界各国の建国の歴史がどういう形をとったか、ということを知ることは、国際交流の上で重要なことと思われるが、比較的に軽視されて来たように思われるので、一筆した。比較言語とか比較文化とか比較文学とか言われるようになったので、比較歴史ということもあってよいのではなかろうか。

（やくまさお・亜細亜大学名誉教授）